全農 JA全農いばらき

営農 News

令和 7 年 5 月 13 日 Newsletter 第 3245 号

ダイズの多収をめざして

本県の大豆の 10ａ当たりの平均収量は 118 kgで（全国平均 161 kg）低い水準にあります。大豆の多収を目指すには、**は種前に土壌環境を改善する**ことや**苗立ちの確保（欠株を少なくすること）**が大事なポイントになります。

１．地力の向上

かつてダイズは「地力を高める作物」と思われていましたが、最近の研究では**「地力窒素を多く吸収する（地力を低下させる）」**ことがわかりました。そのため多収をめざすためには、**たい肥など有機物を施用して、地力を高めることが重要**です。水稲、麦とのブロックローテーションを長く行って、大豆の収量が以前に比べ低下したほ場では、牛ふん堆肥を 10ａあたり 1 トン程度か化成肥料とともに発酵鶏ふんを２００kg程度施用します。また、開花期以降にチッソの肥効が期待できる、大豆全量基肥一発肥料（大豆一発５８８など）も有効です。

２．排水対策の徹底

本県の大豆は約８割が水田（転換畑）で栽培されており、低収の原因の一つは湿害です。特に出芽時に湿害を受けると生育が極度に悪くなり、枯れることもあります。**欠株や生育初期のダメージを挽回することはできません**。**排水をよくして湿害を回避することが、多収をめざす基本です。**

排水対策には暗きょの設置とともに、効果を高めるために弾丸暗きょやサブソイラなどによる補助暗きょを取り入れることも必要です。また、ほ場表面の水を速やかに排水するために明きょを掘り、排水溝につなぎます。ほ場に合わせた排水対策を考え、計画的に取り組みましょう。

３．土壌 pH の調整

ダイズは他に比べて石灰の吸収量が多い作物です。不足すると「さや」の数が少なくなったり、根粒菌の活性が低下したりして収量が低下します。また、豆に「ちりめんじわ」などが発生し、品質が悪くなるといわれています。土壌診断をして **pH（Kcl）5.5～6.0** になるように、消石灰や苦土石灰を施用しましょう。後作の麦にも効果があります。

４．出芽苗立ちの確保（種子処理剤の使用）

湿害以外にも出芽を阻害するものとして**鳥害**（キジバトなど）、**虫害**（タネバエ、ネキリムシ類など）、**病害**（茎疫病などの立枯性病害）があります。**鳥害防止には忌避剤が有効**ですが、ダイズほ場周辺にエサが少ない場合は鳥ががまんして食べてしまい、効果が低いことがありますので注意が必要です。

表１　ダイズ種子処理剤の例　　（令和７年５月１３日現在）

薬剤名	対象病害虫など	使用量	使用方法	使用時期	使用回数	分類
キヒゲンR－２フロアブル	鳥害防止（カラス、ハト） 紫斑病 苗立枯病 タネバエ	乾燥種子 １ kgあたり原液２０ミリリットル	塗沫処理	は種前	１回	FRAC：M３
クルーザーＭＡＸＸ	鳥害防止（ハト、キジバト） アブラムシ類 タネバエ ネキリムシ類 フタスジヒメハムシ 紫斑病 白絹病 茎疫病 黒根腐病 苗立枯病（ピシウム菌） リゾクトニア根腐病	乾燥種子１kgあたり８ミリリットル	塗沫処理	は種前	１回	IRAC：４Ａ FRAC：４と１２

注）分類欄には、FRAC または IRAC コードを記載しました（コード 2 つは混合剤）。

５．適期は種とは種機の調整

本県のダイズの**は種適期は 6 月 10 日から 7 月 10 日ころまで**です。それ以降になると生育量が小さくなり収量が低下します。やむをえず遅まきになる場合は畝幅を 30 cmの狭畝とし、密植の効果で収量低下を少なくします。株間は 15 cm程度とし、より遅くなる場合は 10 cm程度とします。ダイズは水稲などに比べて分枝が少なく、また分枝に着くさや数が少ないので、欠株ができると補償作用は小さく、収量が低下します。欠株を少なくするため、は種機の調整を行い、は種間隔や深さを確認しては種精度を高めましょう。

■ 農薬使用の際は、必ずラベル及び登録変更に関するチラシ等の記載内容を確認し、飛散に注意して使用してください。

■ 営農 NEWS はＪＡ全農いばらきホームページでもご覧になれます。

農機営農支援部　営農支援課　　電話：029-291-1012　FAX：029-291-1040